

2015/6/30  
武田 航平

今秋からイギリスのロンドン・スクール・オブ・エコノミクス(London School of Economics and Political Science, LSE)の経済学博士課程(MRes/PhD)に進学予定の武田航平と申します。現在は京都大学大学院経済学研究科に在籍しています。ここでは、留学を志望するようになった経緯及び、留学決定までの過程について述べたいと思います。

## 1. 留学を志すまで

そもそも大学院に進学しようと思ったきっかけは、学部のゼミで出会った一つの論文でした。僕が所属していたゼミでは、学部3回生で他大学とのインターゼミナールに向けた論文を仕上げるのですが、その題材として、その論文を通じて初めて空間経済学という分野を知りました。その後色々関連研究を調べていくと、この空間経済学という分野の功績によってポール・クルーグマン教授が2008年にノーベル経済学賞も受賞しているということを知り、ますます興味が湧いてきたのを覚えています。実は空間経済学というとかなり幅が広く、様々な産業の立地パターン、都市の形成、都市の成長といった話から国際貿易の話まで含まれます。例えば、「どうして特定の産業、あるいは産業群が特定の場所に集まっているのか」、「どのようにして大都市の分布は決まるのか」、「貿易自由化によって、企業の立地パターンはどのように変わっていくか」といったようなテーマに対し、数理的な理論モデルの構築および実証、シミュレーションを通じて経済学的な説明を与えていくというものです。クルーグマン教授の啓蒙本などを読んでいくにつれて、いつのまにかこの分野に嵌っていき、より学びたいと思って大学院に進学しました。

大学院に進学すると同時に、やはり海外の大学院に行きたいという思いが強くなってきました。というのも、学部時代に所属していたゼミの先輩が留学をされていて(京大から海外の大学院に進学する人は非常に少ないです)、その先輩のお話を聞いていると、やはり第一線の研究者が多い欧米の大学院で研究したいという気持ちが自然と大きくなってきました。また、専門分野の論文を読んでいくうちに、研究のハブとなっている欧米の研究機関に行くということは自分にとっても大きな経験になるという確信に変わっていくようになりました。

## 2. 留学準備

さて、大学院留学を思い立ったら、まず(少なくとも経済学の場合は)修士課程一回生のときは基礎科目(コアコース)でできるだけ良い成績を取ることが重要になってきます。なぜなら、これらの基礎科目での成績は推薦状等を書いていただく際にも目安になるからです。一回生の間は、前期、後期ともにほとんどが基礎科目の学習に時間を費やされ、それらが終わる3月ぐらいからTOEFLの受験を本格的にスタートさせました。これは結構ギリギリで、結果として、足切りに引っかからない程度のスコアを取るのには本当に苦労しました。特に夏休みの8月、9月くらいはかなりの頻度で受験しました。一方で、GREの方は数学のセクションだけ良いスコアを取れば良いと割り切って(他のセクションはそんなに重視されないだろうと信じて)、夏休みぐらいから勉強を始め、10月に一回受験したのみでした。

夏休み頃からはこれらのテストと並行して、推薦状、Personal Statementなどの準備に取り掛かりました。京大からは大学院留学をする人が少ないため、これらに関する情報という

のは非常に不足しており、自分で情報収集するのはなかなか大変でしたが、指導教官の先生方や先輩などにも相談しながら一つ一つ揃えていきました。特に、LSE の場合は提出資料が多く、Personal Statement に加えて Research Proposal や Term Paper など準備しなければならなかったため、結構な時間を費やす必要がありました。またちょうどこの頃、船井情報科学振興財団から奨学生に選ばれたという、大きな後押しを得て、出願の準備が一通り整いました。

### 3. 出願～進路決定

ほとんどの大学院で出願は 12 月上旬～1 月上旬でした。一部の大学院を除いて、提出書類はすべてウェブ上での提出でした。その後、2 月中旬から 3 月上旬にかけてそれぞれ合否が発表され、LSE を含む 5 校から合格を頂きました。結果的に、Personal Statement あるいは Research Proposal は非常に重要だったように思います。やはり合格を頂いた大学についてはこれらの内容と、その大学の強い分野とがマッチしているように感じました。特に、LSE はアメリカの大学に比べて、これらの内容をより重視していたように思います。

そして 4 月、最終的に LSE に進学することを決定しました。ただ、この決断までには結構時間がかかりました。アメリカの大学のオファーの方が、大学の奨学金は充実していましたし、やはり経済学だとアメリカに研究者が集中しているという現状もありました。しかし、指導教官の先生や、Skype で LSE の先生に話を伺ったりするうちに、空間経済学およびその隣接領域では LSE がヨーロッパでも一大ハブになっていること、もともとこの分野が比較的（経済学の中でも珍しく）ヨーロッパが強いことを知り、実際、LSE には進学先の経済学部他に、経済地理専攻の学部（Department of Geography and Environment）や、空間経済学研究センター（Spatial Economics Research Centre）などがあり、研究をする環境としては最高だということが伝わってきました。これらの研究センターには、トップジャーナルに論文を発表している欧米の研究者が多く所属しています。加えて、決め手となったのが、もともとこの分野を知るきっかけとなった学部 3 回生時に読んだ論文の著者が現在、LSE の教授であることでした。

### 4. 最後に

残り 2 か月弱で留学ということで、今はビザ申請などの準備に並行して、今の研究をある程度目途をつけられるように進めています。LSE から送られてきた資料を見ながら、大学の場所柄、ロンドンのど真ん中ということで物価の高さや家賃の高さにはなかなか驚いてはいますが、同時に実感もどんどん湧いてきて楽しみになってきています。最後になりますが、船井情報科学振興財団の皆様には、留学の支援のみならず、様々な貴重な体験をさせていただき心より感謝申し上げます。ようやくスタート地点に立てたところだと思いますので、研究成果という形で報告できるように、これから益々精進していきます。今後ともよろしくお願いたします。